

# 課題研究論文

## トップアスリートの育成

### 特集にあたって

2010年度、本学の教育研究の学術的支柱として「チャンピオンプロジェクト(仮称)」構想が打ち立てられた。これは、競技スポーツ学科・指定種目(男子サッカー、陸上競技、テニス、水泳・水球、柔道、バスケットボール、バレーボール、硬式野球)のコーチングスタッフらが主体となって、学内の組織・機関(学術委員会、将来構想室、スポーツ開発・支援センター等)と連携し、さらには本学の有するさまざまな関連分野のエキスパート(人的資源)の協力を得ながら、国内外で活躍できるトップアスリートを育成することなどを含めた、本学独自の「競技力向上方策」を推し進めようとするものである。

では、一方でこれらの活動のフィールドとなる本学の競技スポーツの現状はどうであろうか。本紀要のアカデミックアワー報告書にも示したように、2003年の開学以来、本学の競技スポーツは着実に発展し、現在も国内外における一定レベルの活躍が続いているが、近年は学生のクラブ加入率の低下とそれに伴うクラブ数の減少、さらにはリーグ内での順位・勝率の低迷などにも見られるように、本学全体の競技力はやや停滞状況にあることは否めない。

果たして、この原因は何なのだろうか。ひとつは、社会状況の変化など外的要因の影響であろうが、最も憂慮すべきは本学の競技スポーツ自体の変質もしくは成熟不足という、内的要因の影響であると考えている。我々は、混沌の第1期にはまず「勝つこと」に最大限尽力し、そしていくつかの競技がそれぞれの目標を達成した。しかしながら、充実期であるべき第2期になり「勝ち続けること」という、高いハードルにぶつかったのである。この現状を打破すべく、今我々には「戦略」が必要とされている。

今回の「トップアスリートの育成」というテーマに対し、本学テニス部の樋口由佳選手にスポットを当てた。彼女は2009年全日本学生室内テニス選手権女子シングルス優勝者であり、本学初の学生チャンピオンである。この輝かし

い功績に至るまでには、彼女自身の弛まぬ精進はもちろんのこと、彼女を経年的にサポートしたスタッフの尽力によるものも大きい。

そこで、本号では樋口選手の軌跡を振り返り、まさに「チャンピオンプロジェクト」の先駆け・モデルともいべき取り組みに関わったスタッフ3氏から貴重な知見を得た。植田 実（競技スポーツ学科 コーチングコース 教授，テニス部監督）は直接指導したコーチの視点で樋口選手と2人3脚で歩んだ4年間を総括し，豊田則成（競技スポーツ学科 スポーツ情報戦略コース 教授）はスポーツ心理学の側面（メンタルトレーニング，スポーツカウンセリング）から，佃 文子（競技スポーツ学科 トレーニング・健康コース 准教授）はアスレティックトレーナーの視点（トレーニング，コンディショニング）から，トップアスリート育成についてそれぞれの見解を述べた。

今後は、学内における連携をより有機的なものにするなど、一連の取り組みをさらに浸透・発展させていくことが望まれる。近い将来、本学から多くの優れたアスリートが輩出されることを期待したい。

渋谷 俊 浩